



「開館1年をふり返って」

鈴木 泰輔（地質標本館長付）

よくわかる地球の歴史45億年 地質標本館ひらく 学園都市の工業技術院地質調査所（朝日新聞）. 規模はわが国で最大デス 地質標本館オープン（毎日新聞）.

“ミニ解説”地質標本館（読売新聞）. 日本初の地質博物館 筑波研究学園都市に誕生（日本経済新聞）. 地質標本館オープン 貴重な資料1,400点 チビっ子らで大にぎわい（いはらき新聞）.

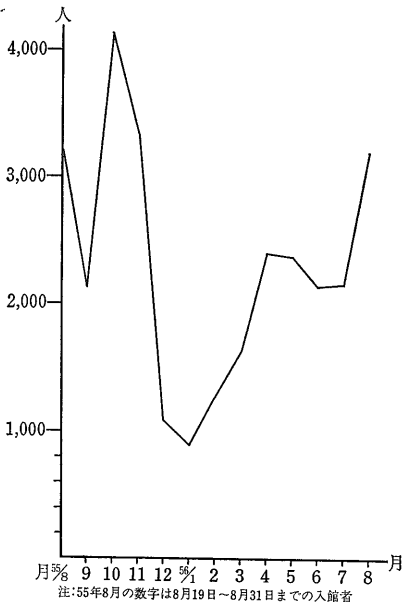
開館 昭和55年8月19日 地質標本館が華々しく開館した. 当日朝のNHKテレビではニュース・ワイド番組で全国の茶の間に開館の知らせと展示内容を放映.

翌日の朝刊各紙は冒頭に掲げた大見出しで一斉に記事を掲載した.

そして一年が経過. 開館延日数（昭和56年8月末まで）247日. 入館者総数30,006名. 開館日における1日当り平均入館者数121人強を数えるに至った.

1年間の開館をふり返り この間の地質標本館にお

第1表 年間月別入館者数



るさまざまな入館状況及び経過などについて記録してみよう.

年間の入館者状況 年間入館者の月別傾向（表1）をみると 旅行シーズンの10月が他の月を圧してピークとなっている. これは団体見学者によるもので 55年10月は46団体 56年10月の予約数をみても51団体（56年10月15日現在）が予定されており この傾向は将来とも続くものと思われる. また 夏休み期間となっている8月にも一つのピークがみられる. 但し 開館当初の55年8月は開館日数がわずか10日間で3,200名を超えているが これは特別であろう. 一方 冬期の12月から3月にかけての4カ月間は 秋期とは対象的に少ない傾向を示している. 特に 12月 1月は低い数字を示す.

入館者の地域別内訳 第2表を見ると 筑波研究学園都市内及び県内の見学者が1 2位を占めている. これは地の利を得ていることに加え 現在の学園都市に不足している文化的施設の欲求不満を地質標本館でいやすと云う住民意識からの現れではないだろうか. 学園都市の人口は 周辺開発地区を含め12万7,400人（55・10・1調査）であり この数字から推定すると 地元見学



地質標本館の見学終了を待つ団体観光バス
多い日には11台のバスが数えられた

第2表 入館者地域別内訳表

単位 人

	茨城県内		茨城県以外の関東地域		関東地域以外の 遠隔地	外国	合計
	筑波学園 都市内	学園外 の県内	東京都内	都を除く 近			
昭和55年							
8月	1,343	1,190	198	365	117	20	3,233
9月	757	506	423	276	96	72	2,130
10月	920	1,273	832	824	216	72	4,137
11月	763	1,233	871	191	270	41	3,369
12月	405	243	222	167	25	25	1,087
56年							
1月	254	208	249	59	89	20	879
2月	374	300	323	118	117	37	1,269
3月	517	223	435	299	131	17	1,622
4月	1,165	524	411	227	47	24	2,398
5月	965	562	361	265	209	16	2,378
6月	348	596	474	501	180	45	2,144
7月	507	713	482	295	92	71	2,160
8月	986	866	459	627	223	39	3,200
計	9,304	8,437	5,740	4,214	1,812	499	30,006

注：昭和55年8月分は19日以降

者の多い傾向は 当分の間 続くものと思われる。次に 東京都内からの見学者が意外に多い。これは工業技術院研究センター各研究所に関連する各界からの訪問者が多いためと 筑波山と学園都市見学をペアにしたバス旅行の団体見学者によるものと考えられる。遠隔地としては少数ながら 国内の道府県全域にわたっており

予想外の結果が得られている。外国人が全体の1.7%を占めているのは 国際協力事業団筑波インターナショナルセンターの存在と 筑波研究学園都市がもともと有している国際性を物語る証拠であると云えよう。

第3表 入館者職業別内訳表

単位 人

	地方 国家	公務員	会社員	高校生 大学生	小学生 中学生	自営・家庭 ・その他	計
	昭和55年						
8月	496	1,596	126	1,015	—	—	3,233
9月	269	1,257	87	227	290	—	2,130
10月	661	1,431	292	1,133	620	—	4,137
11月	1,090	1,102	544	352	281	—	3,369
12月	293	354	73	68	299	—	1,087
56年							
1月	391	234	30	61	163	—	879
2月	438	274	141	126	290	—	1,269
3月	549	292	183	382	216	—	1,622
4月	457	464	338	649	490	—	2,398
5月	628	690	499	112	449	—	2,378
6月	658	539	206	111	630	—	2,144
7月	426	388	236	456	654	—	2,160
8月	702	393	234	1,103	768	—	3,200
計	7,058	9,014	2,989	5,795	5,150	—	30,006

注：昭和55年8月分は19日以降

入館者の職業別内訳 職業別順位(第3表)は 会社員 公務員 小・中学生 自営・家庭・その他 高校・大学生の順となっている。公務員が2位を占めているが 国家公務員・地方公務員の比率はほぼ6:4である。地方公務員のうち特に目立つ団体としては 中・高校の理科担当の教員である。市・県が主催する教育研究会・理科部会等の見学は9件を数える。これらの



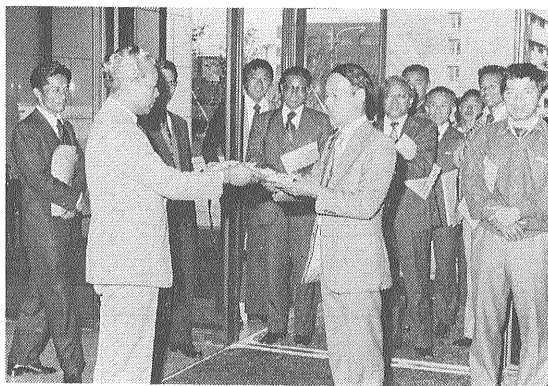
博覧会国際事務局(BIE)予備調査団の来訪
(右端 パトリック・リード議長 昭和55年9月25日)。

うち 遠隔地からの来館は静岡県 神奈川県西部でありこの辺りが一日行程の限界を示す範囲であろう。一方教員の団体として学園内の大学が主催している公開講座(全国の小・中・高校の教員が対象)があり ほぼ定期的な見学コースとして利用されている。小・中学生の団体数は18校であるが 1団体当りの人数が多く 最多数記録は千葉県下の中学校1年生560名であった。高校・大学生は予想に反し 全学生数の34%の入館に止まっている。小・中学生の研究所一般見学と異なり 地学クラブ員か地学専攻 あるいは資源工学部門の学生が多く 見学の中味が濃い。なお 特異な例としては標本館に近い距離にある高校の理科学習に利用されており クラス毎の学習時間に合わせた入館がみられる。自営・家庭・その他が比較的多いのは 各学校の学年及びクラス単位で行う PTA 研修・家庭教育学級の団体によるもので 30団体に達した。最近では 茨城県が主催する県政教室の“学園都市見学コース”に組込まれ 多くの県民の利用を得ている。

アンケート 昭和55年10月末から 入館者による任意のアンケート調査を実施している。56年8月末日までの回収数1,129枚 男性69% 女性31%の割合で協力が得られている。

設問1) 地質標本館全体の印象はいかがでしたか。
(大変よかった) 61% (良かった) 33%と協力者の圧倒的支持を得ている。

設問2) 展示の内容について。
(よく理解できた) 29% (まあ理解できた) 56% (難かし過ぎる) 13% (その他) 2%である。(難かし過ぎる)とした回答者は小学生が殆んどであることを考え合わせる



1万人目の入館者に標本館から心ばかりの記念品を贈呈
水戸市理科教育研究部主催の研修会に参加された 水戸市立第2中学校教員 大森 孟氏が1万人目の幸運者
(昭和55年11月8日)。

と 中学生以上の見学者を対象とした製作者の意図はすべて満たされているとみてよい。
設問3) どの展示物がよいと思われましたか。

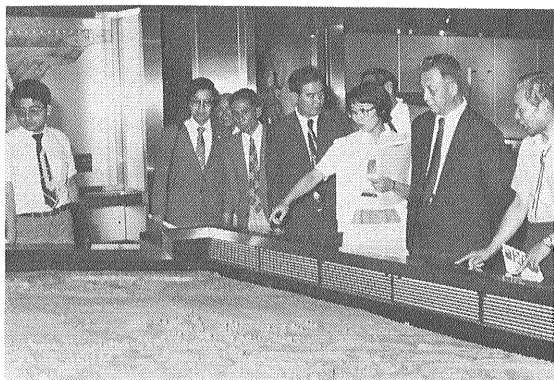
(支持数無制限方式)に対しては 館内の全展示物が一応の支持を得ており アンケート協力者の幅の広さを示している。支持率の高い順に上位10点を列記すると次のようになる。
①生きている化石②宝石・飾石 ③プレート・テクトニクス ④蛍光・放射能鉱物 ⑤地球ができるまで 日本列島の生いたち ⑥富士・箱根火山 ⑦地球儀 ⑧日本列島大型地質模型 ⑨地質年代(タイムトンネル風) ⑩地層の褶曲構造

以上のうち 特に支持率の高い①~⑤の展示物について検討してみると 常に人類羨望の的となっている宝石・飾石コーナーを除けば すべて音声による解説を行うもの または映像を伴うものとなっている。伝達しようとする情報を見学者に対し 親しみ易くかつ 見せるための配慮を多く施した展示物が受けている。

地質標本館内には映像展示室があり 現在 16mmフィルム4本 ビデオテープ5本が用意されている。開館してから1年間の映画上映回数 329回 観客動員数 1万818名である。

設問4) 映画はいかがでしたか。
(大変よかった) 66% (まあよかった) 27%で支持率は大変よい。

設問5) 地質標本館はどのような方法でお知りになりましたか。
(新聞) 8% (テレビ・ラジオ) 3% (雑



中国科学院一行の見学(昭和56年7月8日)
右から2人目 団長の郁文氏(中国科学院秘書長)
右端は筆者

第4表 地質標本館の電波放送内訳

昭和55年8月～昭和56年8月

放送年月日	時間	局名	番組名	内容
55・8・19	07:15	NHK テレビ	ニュース ワイド	開館と展示内容の紹介 展示内容及び見学風景 展示物紹介と年代測定法
55・10・23	10:00	茨城ラジオ	「お元気ですか IBS ラジオです」実況放送	
55・11・19	17:30	NHK 教育テレビ	ジュニア文化シリーズ「未来を開く」の一部	

第5表 地質標本館の新聞記事

昭和55年5月～昭和56年8月

新聞紙名	年月日	キヤプシヨ
読売新聞	55・5・11	地質標本館ほぼ完成 今秋から無料公開 筑波の地質調査所
科学新聞	55・5・9	念願の地質標本館 地調 開館は9月ごろに
日本経済新聞	55・8・16	日本初の地質博物館 筑波研究学園都市に誕生
読売新聞	55・8・17	“ミニ解説”地質標本館
毎日新聞	55・8・20	規模はわが国で最大デス 工業技術院 地質標本館オープン
朝日新聞	55・8・20	よくわかる地球の歴史45億年 地質標本館ひらく 学園都市の工科院地質調査所
いはらき	55・8・20	地質標本館オープン 貴重な資料1400点 チビっ子らで大にぎわい
サイエンス コミュニケーション	1980・8・22	地質標本館
いはらき	55・8・28	地質学への招待① 天井に列島震源分布模型
〃	55・8・29	〃 ② 大型しゅう曲模型 2億年前の日本列島
〃	55・8・30	〃 ③ 日本列島大型地質模型 生成、発展がひと目で
日刊工業新聞	55・8・30	頭脳都市筑波の表情 地質の殿堂オープン 工科院地質調査所
よみうり 学園ニュース	55・9・1	地球の歴史ひとめで 地質標本館に人気
いはらき	55・9・1	地質学への招待④ デスマスチルスの骨格 子共に人気の化石系
〃	55・9・3	〃 ⑤ 地質年表タイムトンネル 化石と岩石でたどる46億年
〃	55・9・4	〃 ⑥ 美しい光と色「宝石の世界」 真壁産出の「ざくろ石」も展示
〃	55・9・8	〃 ⑦ 目を奪う鉱物・化石世界の4万点を分類
朝日新聞	55・9・11	“視点発掘”地質標本館 神秘で膨大 地球46億年の歩み
いはらき	55・9・22	大もて地質標本館 人気者の悩みちらほら
▲ 〃	55・9・26	BIE 調査団迎えた会場候補地
▲朝日新聞	55・9・26	科学博用地 リード議長も視察
▲毎日新聞	55・9・26	科学博開催 明るい見通し 現地予備調査終える
▲読売新聞	55・9・26	筑波科学博 現地調査終わる BIE 議長も GO
北日本新聞	55・10・1	地球のすべてが一目 貴重な研究資料並ぶ
京都新聞	55・10・3	筑波の「地質標本館」 豊富な資料展示 恐竜の足跡も
新潟日報	55・10・7	地球の生いたち一目で 地質標本館筑波に開館
高知新聞	55・10・15	筑波の地質標本館 地球の岩石ざらり
少年写真ニュース	55・11・28	火山の地質と火成岩
日本経済新聞	56・1・17	“ぶらり新名所”まあっ これができたての列島 地質標本館 筑波研究学園都市
科学新聞	56・2・13	役割り増す地質調査所“標本館”
読売新聞	56・3・8	“博物館再発見”最古の石
▲朝日新聞	56・4・14	科学技術週間の筑波学園都市
▲朝日新聞	56・6・4	学園都市ソフト時代—11 “へソ”
朝日新聞	56・7・9	中国の科学者一行学園都市を見学 地質調査所に興味
いはらき	56・8・19	地質標本館開館一周年 いまや学園都市の“新名所”

注 ▲印は記事中に関連事項として地質標本館が取上げられているもの

誌) 3% (知人から) 43% (その他) 42%
%である。(その他)は団体入館者が組織
を通じて知ったことを示す。

展示物の撮影 地質標本館は 原則として館内展示
物の模写・撮影を禁止しているが 特別の要望があれば
申請による許可制をとっている。 過去1年間の撮影許

第6表 地質標本館の紹介雑誌

昭和55年8月～昭和56年8月

誌名	巻・号	キャプション	発行所	発行年月
TSUKUBA STUDENTS	91	地質標本館の一般公開について	筑波大学	55・9・24
日経アーキテクチュア	11	ハイライト・工業技術院地質調査所地質標本館	日経マゴロウヒル社	55・11
自然	11	P.O. BOX 地質調査所標本館	中央公論社	55・11
配管と装置	11	おいでください“地質標本館”	三幸企画	55・11
The Japan Industrial & Technological Bulletin	8-8	Geological Survey of Japan Geological Museum	Japan External Trade Organization	Nov.,1980
地学研究	31	地質調査所 地質標本館の公開	日本地学研究会	55・12
Open	12	Round UP 地球の中味を見ながらデートするのも悪くない	チーム	55・12
博物館研究	15-12	工業技術院 地質調査所 地質標本館	日本博物館協会	55・12
ロアジール	2	ロアジール談話室 地球博物館	余暇開発センター	56・2
時の動き「政府の窓」	56-3	目でみる“地球の科学旅行”をどうぞ	総理府	56・3
建築技術	358	今月の表紙 工業技術院 地質標本館	建築技術	56・6
建築技術	360	今月の表紙 富士火山帯大模型	〃	56・8

可件数 127 例を分析した。 撮影フィルムの使用目的は大半 (44%) が教員による教材であり 次いで報道関係の取材 (17%) 学生による研究・勉学素材 (15%) 記念 (10%) 等となっている。 記念を目的とした撮影は外国人による希望者が多いが 中には小学 6 年生団体が卒業アルバム作成のためと云うほほえましい申請が含まれている。

マス・コミュニケーション 地質標本館がこの 1 年余の間に マスコミによって取り上げられた件数は 電波報道 3 件 新聞報道 35 件 雑誌関係 12 件に達している。 地質調査所 100 年の歴史において 当所がこれ程スポット・ライトを浴び マス・メディアによる伝達が行われたことがあってあったであろうか。 これは地質標本館の位置づけが 地質調査所の 1 別棟であると云う狭まい認識に止まらず 今や 筑波研究学園都市の 1 文化的施設としての格付けが定着したことを裏付ける。

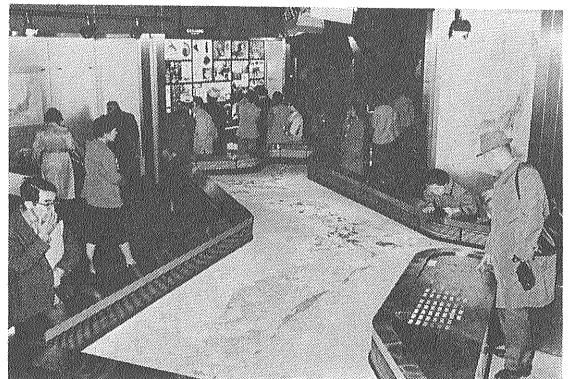
テレビ・ラジオ (第 4 表参照)

新聞 地質標本館が話題の中心として新聞紙上に取り上げられ始めたのは 同館がほぼ完成した時期の昭和 55 年 5 月をもって嚆矢とする。 その後 昭和 56 年 8 月までの間に 29 件 地質標本館が登場する関連記事を含めると 実に 35 件に達する (第 5 表)。 但し この数字は確認し得たもののみであり あるいは 地方紙などにもっと多くの報道がなされているのかも知れない。 1 年余の記事の推移をみると 開館の予告——華々しい開館記事——展示内容の詳細な紹介——標本館の運営——学園都市における標本館の位置づけとなり 更に最近では 昭和 60 年に茨城県下で開催される予定の科学万博がらみの関連記事が目立っている。

雑誌 月刊 9 誌 半月刊 3 誌の合計 12 誌が地質標本館の記事を掲載している (第 6 表)。 雑誌の種類は商業誌 4 専門研究誌 5 政府関係の団体広報誌 2 大学機関誌 1 となっている。 日経アーキテクチュアは 折り



茨城県竹内藤男知事の見学 (昭和56年10月7日)
右端 竹内知事 2人目 当所 山田企画室長



展示室の混雑風景

込み表紙裏に“展示ホール,, の見事なカラー写真を掲げ
本文では「ニュース〈建築〉」の項で専門的解説がなされて
いる。

筑波研究学園都市内のユニークな月刊紙 Open には
若者向けのタイトルが付けられ 記事内容もナウな若年
の心理を惹きけるように書かれており独特である。
財団法人 余暇開発センター発行のロアジールには イ
ギリスの歴史学者 J・バラクラフ氏の感想として次の文
を載せている。「イギリスにも博物館は多いが 古い
物をただ集めて陳列しているだけのものが多い。それ
に比べると この博物館は実におもしろいですね。エ
レクトロニクスを随所に使って 地球の50億年の経緯を
本当に興味深く見せてくれます」地質標本館の展示基本
計画の理念をずばり云い得ている。

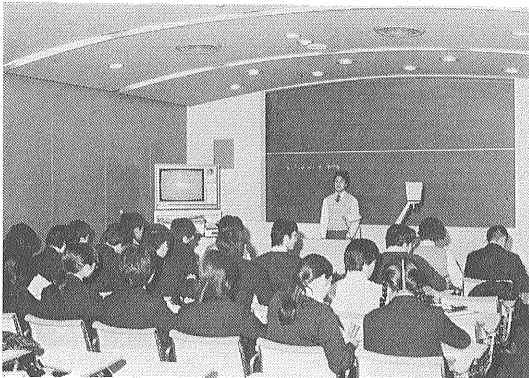
サービス 地質標本館見学者には ホール受付にお
いて館内案内書を配布している。開館当初は「Ge-
ological Museum」絵はがき型式の案内書 500部をオー
プニング記念として配布。9月に入って A—4判 三
つ折 8頁オールカラー版の「地質標本館」に切換え 2
万部を配布。

昭和56年6月からは A—5判 二つ折 4頁の「観覧の
しおり」及び「Geological Museum」の和・英文2種を
揃え現在に至っている。また 見学者が例えば理科担
当の教員や地学クラブの学生などの場合には A—5判
二つ折 4頁 地質年代測定法解説書「岩石の年令をはか
る」を特別に配布するよう配慮を加えている。一方 展
示ホールの一隅には 記念スタンプを置いた。和文2
個デスモスチルスと富士・箱根火山。英文2個 褶曲
露頭及びアンモナイト合計 4個をシンプルにデザインし
見学者の記念品的欲求を満たしているものである。地
質標本館事務室には 身障者用の車椅子が2台用意され

ているが 過去1年間の身障者見学3団体は あらかじめ
自家用車椅子を運転してきており 事務室の備品が活
用された例は1件だけであった。地質標本館の館内案
内回数は 1年間で115件であった。このうち 分野
別の関連担当部課が行ったもの46件 その他は標本館長
付が担当した。但し この数字は登録されている件数
のみであり 一般公開日に各部課が独自に対応したも
のは含まない。

事故 受付等業務日報に報告されている事故の発
生は 軽度の怪我2件 急病2件 忘れ物3件と入館者
数に比し 意外に少ない。怪我：例—1 玄関出入口
の横にはめ込まれている大型ガラスに気付かず 額をぶ
つけ 小さなこぶが出来た。例—2 階段で転び
脛に擦傷が出来た。急病：2例とも女性 急に気分が
悪くなり 事務室内に設置してある医療応急ベッドで
休息し 回復後退館。忘れ物：例—1 運転免許証と
現金 例—2 かばん 例—3 トイレに財布。調査
の結果 いずれも落とし主が判明し返却している。

メンテナンス 展示物の保守 維持管理についてみ
ると 当然のことながら 入館者の多い月に件数が増加
する傾向がある。一般的な保守 例えばオートスライ
ドのカセットテープ・デッキのヘッド・クリーニング等
は日常的に行い また 簡単な消耗品の交換 (例えば 一
般照明球 各種展示物の光源球・発光球及びフィルム等) は
事項発生後即時復旧している。ジオラマ シミュレー
ション装置等の作動機構に故障が生じた場合は回復に数
日間を要している。過去1年間に消耗品の交換件数110
件 作動機械類の故障件数23件であった。開館後 展
示物の追加工事を行い 館内の一層の充実を図った。
特殊展示ケース6件 (ダイヤモンド 自然金 輝安鉱 油頁岩
近着標本ケース及び出版物陳列ケース) パネル3件 (地震と
断層 日本炭分類表及び世界の石炭分類比較表)。また 第
4展示室の分類標本類は 地質部地質標本課によって
見学者が一層観察し易いよう展示に工夫が凝らされ 更
に 鉱石 鉱物等は全点のクリーニングが行われた。



映像展示室の利用風景

1年を振り返って 地質調査所の研究成果を一般社
会に理解し易く紹介し あわせて 地球に関する科学情
報を広く普及することを目的として設置された地質標本
館は 当初の心配を他所に予想以上の成功をみたと言え
よう。

昭和60年開催予定の EXPO' 85 と関連し 筑波研究学
園都市の地質標本館は 今後ますます人々に親しまれ
利用されることと思われる。